

浄相院
だより

寿光

第54号

平成23年9月12日
発行：浄相院
畑中芳隆

〒332-0035
川口市西青木1-10-34
TEL 048 (251) 5984
FAX 048 (251) 5792



法爾ほうに あるがままに

住職 清譽 芳隆

先日、布教師の研修で総本山知恩院に行く機会を得ました。午前九時開始だったので早朝一番の新幹線で京都に着いて八時十分すぎ、そこから地下鉄を乗り継いで東山駅で降り立って歩くこと数分で三門をくぐって大きな瓦屋根の御影堂みえいどうの前に立つと九時十分前でした。随分便利になったものだと感じます。私は高校時代を東山高校という浄土宗の学校で過ごしましたが、当時は昭和四十年代後半で地下鉄などなく、京都市内はまだ市電の路面電車が主な交通手段でした。さらに交通渋滞もひどくどこに行くのも時間がかかりました。

御影堂は法然上人がお祀りまつらされている知恩院最大の建物であり、来月行われる八百年大遠忌が奉修される所です。当山からも総代さんはじめ十数名の方々が参加いただく予定です。さてその日御影堂に上がると大きく「加諡かじ法爾大師ほうにだいに」と書かれたお軸が目に入りました。加諡とは天皇陛下が高僧にくださるおくり名のことであり、平成天皇が法然上人に法爾大師ほうにだいにというおくり名を八百年遠忌にあたり本年三月

十六日にくだされたのでした。

動かしようのない自然の道理のことを『法爾』といいます。たとえば炎は空に上り、水は低いところに下っていくように。食べ物の味はみな異なり、甘いものもあれば酸っぱいものもあるように。つまりもともと決まっていること、さらには私たちがどうかしようとしてもどうにもならないことだと言えましょう。

阿弥陀佛が私たちの命終わるときに必ず迎えてくれること『来迎らいごう』も自然の道理『法爾』のようにあるがままのこととして考えなさいと法然上人は示されています。何とかして救われたいと私たちが思うとき、願うとき、そこには必ず「助けてください」という意味のことばが発せられるはずで、それが「ナムアミダブツ」とお念仏を称えることに他なりません。

刻々と時は過ぎてゆきます。その日の研修が終わってから私は久方ぶりにお世話になっていたお寺を訪ねました。当時のご住職はすでに亡くなられて今は留守番の方が昼間だけおられる無住の寺になっています。高校生のころは自分がいずれ老いて死に往く存在であることなど実感できませんでしたが、今はどうでしょうか。限りあるこの世をどう過ごしてゆくか。そし



知恩院・御影堂

てできれば残りの人生を安心して生きてゆくにどうすべきか。そのために私たちは仏教の教えから、お念仏の教えから気づかさせてもらえることがあることを知る必要があります。当山では八百年大遠忌行事としてお念仏の教えを皆さま方にさらに身近に思っていたために十二月十日に報恩念仏会として法話を中心とした会を実施する運びとなりました。ご案内はあらためていたしますが、檀信徒の皆さま方、ご縁のある方々がぜひともご参加くだされば幸いです。

今年、陛下が法然上人に『法爾』の大師号を加諡かじくださったことに私たちお念仏を称える者たちはあらためて思いをいたして、あるがままに阿弥陀佛の救いに身を委ねて声に出すお念仏が大事かと存じます。